

ロシア人の聖地巡礼記

——ルキヤーノフの場合——

中 村 喜 和

I 旅のルート

1701年から1703年にかけてイワン・ルキヤーノフというロシア人が聖地エルサレムへの巡礼を行なった。その記録は1862年に断片を抜粋してチェルニーゴフとカルーガの地方雑誌に発表され、完全な形ではじめてその翌年「ロシアの古文書」(Russkij arkhiv)誌のいくつかの号に分載された。後者で写本からの翻刻を受けもったのはプーシキンの友人として知られる詩人兼書誌学者のセルゲイ・ソボレフスキイである。その後1866年にこのテキストが再刊されただけで、今日ではルキヤーノフの聖地紀行は比較的に目につく文献となっている。それにもかかわらず彼の旅日記はいくつかの点できわめて注目すべき特徴をそなえているので、以下ソボレフスキイの校訂テキストにもとづいてルキヤーノフの旅の足跡をたずね、その巡礼記録のさまざまな特質を考えてみたい。(カッコ内の数字はページ、より正確には各ページ左右の段数を示す。)

まず、ルキヤーノフの旅の道筋は次のとおりであった。〔 〕内は推定である。

1701年12月25日⁽¹⁾以後　モスクワ出発

12月30日　カルーガ出発

1702年1月1日　リフィン着、以後ベレフ、ボルホフを経て

1月6日　オリョール着、5日間滞在。以後クロームイ、セーフスクを経て

1月17日　ウクライナにはいり、グルホフ、クロレヴェツ、バトゥーリン、ネーヅンを経て

(1) 後述する旅券発行の日付は1710年6月5日。しかしこれは書き誤りで、他の未刊写本とつき合わせても、またテキスト中で言及されるスルタンの統治年代から考えてみても、出発は1701年の年末と見るべきとするのが定説。cf. K.-D. Seemann, *Die altrussische Wallfahrtsliteratur*. München, 1976, S. 366 以下, T.G. Stavrou and P.R. Weisensel, *Russian Travelers to the Christian East from the XIIIth to the XXth Century*. Columbus, 1986, p. 55 以下。写本の中には巡礼記の作者をレオンチイとする異本もあるが、これはルキヤーノフが剃髪して修道士となつてからの僧名であると考えられている。cf. Stavrou and Weisensel, *op. cit.*, p. 56.

- 1702年 1月31日 キーエフ着
 2月 3日 キーエフ発、ファストフを経てポーランド領（現在はウクライナの一部）にはいり
 2月11日 ネミーロフ着
 2月14日 ネミーロフ発
 2月17日 トルコ領ソローキ着（現在はモルダヴィアに属する）
 2月24日 ヤシ着，13日間滞在
 3月12日 ガラツィ着，ここからドナウを船で下り，トゥルチャ，黒海を経て
 3月22日 イスタンブル（コンスタンチノーブル）着，3カ月あまりの滞在ののち
 6月26日 アドリアノーブル（現エディルネ）着
 7月13日 アドリアノーブル発，イスタンブルに戻る
 7月26日 [イスタンブルから] 船で出発し，マルマラ海，エーゲ海，東地中海を経て，
 8月11日 ナイル河口のラシード着，7日間滞在
 8月17日 ナイルをさかのぼり，4日目に別の支流を下りディムヤート着
 8月24日 船に乗りこんでディムヤート発，アクリ，ヴネサイドを経て
 9月14日 ヤッファ着，3週間の滞在ののち
 10月 7日 ロメル着
 10月28日 ロメル発
 10月20日 エルサレム着
 1703年 1月18日 エルサレム発，ヤッファから船でアクリ，ディムヤートを経て
 [4月21日] イスタンブル着，同地を船で出発してガラツィ，ヤシなど往路を逆にたどり，
 [6月29日] ソローキ着，ファストフを経て
 [7月11日] キーエフ着，6週間滞在，ネージンを経由して……（記録はここで中断している）

古くよりロシアから東地中海の聖地におもむくルートには，大きく分けて水路と陸路の二通りの方法があった⁽²⁾。ルキヤーノフが選んだのはモルダヴィアからイスタンブルまでは黒海を航行し，イスタンブルからふたたび海上路でエジプトを経由する水路のルートだった。12世紀初頭の修道院長ダニールによる名高い聖地巡礼以来，カフカースを南下したりアナト

(2) この問題については「地中海論集」ですでにふれたことがある。Y. Nakamura, *Some Aspects of the Russian Pilgrimage to the Mediterranean Sacred Places. Studies in the Mediterranean World, Past and Present.* Tokyo, 1988, p. 25-35.

リアを縦断したりする陸路よりは水路のほうが一般的だったようである。

ルキヤーノフはひとりで旅をしたのではなかった。体調をくずしてキーエフから1人の仲間が引き返した。イスタンブルに着いたとき、ルキヤーノフを含めて一行は5人となっていた。イスタンブルを出帆する直前に、もう1人ルカーという者がモスクワへ戻ることになった。したがって聖地巡礼を終えての帰途エベソスで同行4人だったという記述(316)は平仄が合う。ただし往路ガラツィからイスタンブルに向かう船の上であるポーランド人修道僧に頼みこまれて彼を一行に加えたらしいが、この者が上記4人の中に含まれているかどうかは明らかでない。

II 旅券の効用

ルキヤーノフはその記録の冒頭に「通行証」を掲げている。「天佑を保有する全ロシアの専制君主たるツァーリ」ピョートル(1世、在位1682-1725)から「偉大な君主たるスルタン」ムスタファ(2世、在位1695-1703)に宛てたもので、そこではモスクワの住人で聖母ポクロフ教会の司祭ルキヤーノフとその同行者たちを彼らの所持品ともども聖地エルサレムまで遅滞なく往復せしめることが求められている。当時ロシアとトルコの両国間に結ばれていた条約はその第20条に、聖俗のロシア人がエルサレムをおとずれる場合に通行税を支払う必要がなく、かつ身の安全が保証される、という規定を含んでいたこともこの文書の中で述べられている。この「通行証」は現代の観念では旅券とほとんど同一の意味をもっていったようである。(「通行証」の中でルキヤーノフはモスクワの住人と呼ばれているが、元来その出身地がモスクワの南東約200キロのカルーガであったことは本文の記述から明らかである。)

ルキヤーノフは大ロシアと小ロシア(ウクライナ)との境界にあたるセーフスクを手はじめに、トルコ領がはじまるソローキ、ヤシ、イスタンブルなど多くの場所で当局にこの書類を提示している。その効果は絶大で、ルキヤーノフの一行はつねに通行税やその携行品に対する関税の支払いを免れることができた。トルコの首都イスタンブルでは所持していた品物に対して一旦「20ターレル」の関税を課されたが、ルキヤーノフは驚くべき執拗さを發揮してついにその支払いに応じなかったばかりか、税関の官吏に要求してそれ以後トルコ帝国領内のどこにおいても関税を免除する旨の文書を一筆したためてもらった(176)。

ところでこの「所持品」(rukhljad')の中味は何であったか。量から見れば、それは複数の馬で運ぶほどの荷駄からなっていた。ルキヤーノフは何ひとつ説明してはいないけれども、それは着替え用の衣服や身のまわりの品だけではなくたはずである。イスタンブルで知り合ったモスクワ商人に紹介してもらい、あるギリシャ人商人に荷物の一部の売却を依頼している(182)。おそらくこの中にはたとえば毛皮のようなロシアの特産品が含まれており、その売却金は彼らの旅行費用にあてられたものと想像される。これより約1世紀半も前のこと、イワン雷帝の命をうけてボズニャコフが聖地巡礼を行なったとき(1558-1561)、彼がツァ

ーリからの贈物として持参したのは毛皮だったことが想起される⁽³⁾。

ツァーリの旅券はエルサレムですら人目をひいたが(253)、トルコの国内でより大きな効果があったのはスルタンから発行してもらったヴィザの方だった。イスタンブルから200キロも西よりのアドリアノーブルまでわざわざ2週間以上もかけて往復したのは、「スルタンフイルマンの許可書」であるこのヴィザを手に入れるためだった。このころスルタンは——ルキヤーノフの言うところでは近衛部隊イエニチェリの勢いを恐れて——アドリアノーブルの宮殿に住んでいた。このヴィザはエルサレムの外港のヤッファに上陸したとき、エルサレムからイスタンブルに戻ったとき、大いに役立った。ヴィザと合わせてさきにイスタンブルで手に入れていた免税証明書を提示することによって、どこでも上陸税や関税を支払わずにすんだからである。

もっとも、ルキヤーノフらがエルサレムを去ろうとしたときこの町を支配していたトルコ人パシャがすべての正教徒から「3チェルヴォンヌイ」ずつ、異端の徒たるカトリック教徒やアルメニア人からはその倍額を徴収し、代わりに「印判」を与えた(300)というが、その賦課金の性格はよくわからない。冥加金あるいは出市税ともいふべき筋合いのものであったろうか。

Ⅲ 旅の目的

「聖なる町エルサレムと約束の地を見たいという気持に駆られた」(131)——ルキヤーノフはパレスチナへの巡礼を思い立った動機について自らこう語っている。またイスタンブルで思いがけなく同胞のロシア人と邂逅し旅の目的を問われたときには、「誓いを立ててエルサレムへ行く」(173)と答えた。ただその誓願の内容は明らかにしていない。

とはいえ、19世紀以来の研究者たちはルキヤーノフのこのような説明に満足していない。それというのも、刊行されたテキストに対する後注の形で、「ロシアの古文書」誌編集部が写本の出所として、最近死亡したオリョールのさる旧教徒の蔵書中に発見されたと述べているためである。この時期の旧教徒の動静に最もよく通じていた官吏の一人で作家でもあったメーリニコフは、その論文「容僧派旧教徒の歴史的概観」(1864-66年発表)の中でルキヤーノフを派遣したのは旧教徒の共同体であり、その旅の目的はギリシャ人の信仰のあり方を実際にその目で確かめてくること、彼らのもとから主教を招致する可能性をさぐってくること、の二つであったと言い切っている⁽⁴⁾。たしかに17世紀の50年代以降ニーコンの典礼改革に反対して国教会から分離した旧教徒にとって、ニーコンが改革のさいに範とあおいだギリシャ風の教会儀礼の真の姿を知ること、ならびに組織として自前のヒエラルキーを創出することは緊急の課題であった。僧侶の存在意義を一律に否定してしまった無僧派と異なり、

(3) A.N. Pypin, *Istorija russkoj literatury*, Vol. 2, SPb., 1911, p. 202.

(4) P.I. Mel'nikov, *Polnoe sobranie sochinenij*, 2nd ed., Vol. 7, SPb., 1909, p. 29.

信者と神のあいだに仲介者としての司祭の役割をみとめる容僧派はとりわけ後者のヒエラルキー問題を切実なものと感じていた。エルサレムよりもイスタンブルに滞在した期間の方が長かったこともメーリニコフの主張を裏づける根拠となり得よう。最も肝心なことはしばしば文字に書かれないものらしい。メーリニコフの論文はルキヤーノフの巡礼記録の刊行以後に発表されたが、彼の手もとにはルキヤーノフに関して別の資料が存在したかもしれない。

その後メーリニコフの説をさらにすすめて、リレーエフという研究者がルキヤーノフはドニエプル川上流のヴェトカにあった旧教徒共同体の司祭であり、カルーガ南西のジズドラに近い森の中に僧庵をいとなんでいたことまで突きとめた⁽⁵⁾。

ルキヤーノフがいわば国教徒ではなく旧教派に属していたことは彼の巡礼記の節々からもうかがうことができる。その第一はキーエフの名高い洞窟修道院に詣でたとき、勇士イリヤー・ムーロメツ⁽⁶⁾のミイラが2本指で十字を切っているのを見たことと強調していることである。「彼の死せる肉体は仇敵どもの誤りを証明しているのだ」(151)とルキヤーノフは誇らしげに書いている。ニーコンの犯した最大の誤謬は2本の指で十字を切ることを禁じ、3本指による十字を強制したことである、とすべての旧教徒は考えていた。

イスタンブルの総主教をはじめとするギリシャ人僧侶の腐敗墮落ぶりに対してルキヤーノフが仮借のない筆誅を加えているのも、旧教徒の立場から見れば当然のことであった。それはイスタンブルに到着してすぐ総主教庁をたずねて宿を求めたところ、贈物がなければ宿坊を与えるわけにはいかないとすげなく断られた(179)私的な怨恨のせいばかりでなかった。ルキヤーノフはギリシャ人の不親切に長々と苦情を書きつらねているほか、この当時のギリシャ教会と東方正教会の本来の慣習が一致しない点を10箇条にまとめて示している(214)。すなわち、①ギリシャ人は洗礼にさいして全身を浸水せず水をふりかけるだけ、②彼らは十字架を身につけない、③十字の切り方がまちがっている、④教会の中でも帽子をぬがない、等々。高僧たちが髭を剃って平気でタバコを吸い、トランプや将棋にうつつをぬかしていることも、旧教徒ロシア人の目には言語道断の沙汰とうつつた。

また正教徒以外のキリスト教徒、すなわちカトリック教徒やアルメニア派キリスト教徒に対しては、ルキヤーノフは彼らを「異端」と呼び、ギリシャ人に対する以上に憎悪の念をむきだしにしている。

ルキヤーノフの宗教的不寛容はウクライナの僧侶たちやキーエフ神学校の生徒たちにまで及んでいる。17世紀後半から18世紀にかけてカトリック圏ポーランドの影響のもとにキーエフが文化面でモスクワをはるかにリードしていたことはよく知られている。その原動力となったのが17世紀30年代に洞窟修道院内に設立された神学校だったのである。ここからはピョートルの改革の協力者たちが輩出した。しかし旧教徒ルキヤーノフにとっては学生たち

(5) M.I. Lileev, K voprosy ob avtore "Puteshestvija vo Svjatuju Zemlju" 1701-1703 gg. Moskovskom svjaschchennike Ioanne Luk'janove ili startse Leontii. *Chtenija v Istoricheskom Obshchestve Nestora-Letopistsa*. Vol. 9, 1895, Otd. II, p. 25-41.

(6) ロシアの民衆のあいだに口承で伝わった英雄叙事詩の主人公。実在した人物ではないが、キーエフの洞窟修道院内のおびただしいミイラの一つが彼の遺骸と信じられていたらしい。

は単なる血気さかんならず者としか思われなかった。「彼らは頻繁に盗みをはたらき、人殺しさえするが、裁判にかけられることはない」(149)と彼は述べているのである。

ここで疑問が生ずるのは、旧教徒たるルキヤーノフがなぜツァーリ・ピョートルから「通行証」の発給を受けることができたかということである。その長い治世のあいだにかなりのブレはあったとしても、ピョートルは旧教徒に対して概して強圧的な態度でのぞんだ。旧教徒はその信条からいっても、改革の反対者である保守派と結びつく要素を多くもっていたからである。とはいえ、ルキヤーノフの文章にはピョートルをアンチキリストときめつけるような一部の無僧派旧教徒に見られたはげしい反ツァーリの感情が影をひそめている点も見のがせない。それどころか、トルコ帝国の支配下にあるキリスト教徒がピョートルを解放者と思見なしてロシア軍の南進を期待しているとも書きしるしている(201, 306)。「通行証」の発行の事情は謎として、異境を旅したルキヤーノフに愛国的感情が目ざめたのはたしかなようである。

IV 旅のあり方

われわれはルキヤーノフの丹念な旅日記のおかげで、聖地のトポグラフィー以外にも、当時の旅のさまざまな興味ぶかい様相を知ることができる。

彼の巡礼の真の目的が何であったにせよ、はっきりしているのはロシアの国境を一步出たとき頼りにすべき知人縁者が1人もいなかったことである。ドナウ下流地方に旧教徒の集落が形成されるのは18世紀半ば以後に属する⁽⁷⁾。イスタンブルとエルサレムにロシア人巡礼のための宿泊施設がもうけられるのはそれよりさらに1世紀ものちだった⁽⁸⁾。最初から覚悟していたにちがいないが、実際に見知らぬ外国人のあいだで何一つ言葉が通じない心細さを味わったとき、いっそのまま故国に帰ろうかという気持になった、とルキヤーノフは率直に告白している(163)。小ロシアからはじめて異境のモルダヴィアに入り、イスタンブルまで同行してくれるはずだったギリシャ商人が何かの都合で別行動をとらざるを得なくなったときのことである。言語不通の不便さを彼はイスタンブルに到着したときも、エジプトのラシードに立寄ったときも繰返している。

歩きはじめのロシア国内の旅では、町ごとにルキヤーノフの一行に宿と食事を提供してくれる知人がいた。旧教徒特有の人脈ネットワークが存在したのである。ロシア国外では彼らの宿はおおむね正教会の修道院であった。ただし、すべての修道院が快く門を開いてくれたわけではない。たとえば、イスタンブルでは総主教庁でもシナイ修道院でも宿を断られ、やっとエルサレム修道院へ行って二部屋をもらうことができた。帝都を出帆してから最初の寄

(7) 拙稿「ネクラソフ派カザークの祖国帰還まで」『地中海論集』第9号、1984、73-89ページ、および「アタマン・ガンチャール——あるロシア旧教徒の苦難の生涯」『言語文化』第21号、1984、2-27ページ。

(8) 拙稿「ウラルから長崎まで——ウラル・カザークの「白水境」探索紀行」安井亮平編『日本とロシア』、1987、93-104ページ。

港地ラシードではこのエルサレム修道院の紹介状が物を言い、次のディムヤートではラシードの修道院長の紹介のおかげで容易に宿を確保できた。さすがにヤッファとエルサレムには巡礼のための宿坊が完備していた。

言葉がわからずに困っているとき、ルキヤーノフらを救ってくれたのはロシア人奴隷だった。このころロシアは地中海沿岸地方への有力な奴隷供給源の一つだったのである⁽⁹⁾。黒海を出てイスタンブルの金角湾に乗船が入港したとたん、ルキヤーノフはトルコ人に囲まれてまるで捕虜になったかのような錯覚をおぼえたが、沖仲仕のような仕事をさせられていたらしいロシア人の奴隷たちと言葉を交わして少なからず勇気づけられた(173)。税関で無事に荷物を受けとることができたのはそのうちの一人コルニーイのおかげだった。その後ルキヤーノフらはエーゲ海の町サキズ(223, 所在地不明)と帰途のエペソス(315)でロシア人奴隷と出会っている。エペソスではレモンの袋を相手からもらったばかりでなく、一夜の宿さえも提供された。

言葉が通じなくても町なかはまだ安全だったが、道中の困難は筆舌に尽くしがたいものがあった。モスクワを出発したのは年の瀬がおしせまった時期だったけれども、この年はなぜか冬のさなかに雨が降り、オカ川やドニエプル川を越えるのに渡し舟を使っている。当然道路はぬかるみで、橇あるいは荷車をひく馬を連れての旅は苦労が多かった。当時のロシア領ウクライナとポーランド領との境界をなしているステップは、5日間歩いてだれひとり人間の姿を見かけないほど荒涼としていた(155)。土地は肥えているもののクリミア・タートルが出没するせいである、とルキヤーノフは書いている。モルダヴィアは山の多い地形だけに、悪天候についての旅は一層難渋をきわめた。

意外なことに、彼らはロシア国内でもバルカン半島でも何回か夜なかに旅をしている。夜を徹して歩いたこともあり(138, 月夜であったか?⁽¹⁰⁾)、夜の「2時」にやっと宿屋に着いたこともあった(146, 2時とは日没後2時間目ということであろう)。

平原の民が黒海や地中海の船旅で船酔いに苦しめられたことは不思議ではない。ロシア人たちは「ハンガリーの高い山」(トランシルヴァニア・アルプスらしい)を見てその威容に驚嘆したあと、ドナウから黒海に船で乗り出し、生まれてはじめて海というものを眺めたものだった(169)。

自然の悪条件とは別に、身の危険を覚えたことは二度あった。最初はパレスチナでロメルからエルサレムに向かったときである。ヤッファとロメルの町にはトルコ人の代官がいたが、ロメルから先はほとんどエルサレムの入口までトルコの支配が及んでいなかったようである。正教徒をはじめカトリックやアルメニア人からなる巡礼たちは約1500人の大キャラバンを組んで聖都を目指したが、アラブ人たちがまるで「蜜蜂のように」最も穏和な旅人たちに襲い

(9) この問題に関しては時代がややずれるが、松本栄三「14-15世紀の黒海沿岸とロシア」『地中海論集』第9巻、1984、55-72ページ、が参考になる。

(10) 1702年1月5日の深夜にボルホフを出発し6日にオリョールに着いたのである。京都大学の山口巖氏の調査によれば当夜の月齢は17日であった。

かかってきたのである。「彼らはわれわれの衣服をはぎとったり、裾をつかんで馬の鞍からひきずりおろしたりした。「金をくれ」とわめきながら棍棒でなぐりかかる者もいた。「金をくれ」と叫んで懐に手をつっこむ者もいた。金を与えても与えなくても災難だった。金を取り出すと横からひったくる者がいたし、金を与えないとなぐりかかるのだった……」(246)。

この経験にこりて、帰り途ではルキヤーノフの一行を含むキャラバンは初めからアラブ人護衛をやっていた。護衛は一人について60パラずつ料金を徴収した代わりに、あやしいアラブ人があらわれるたびごとに、彼らにタバコや小銭を与えて巡礼に手出しをさせなかった。万が一巡礼が被害をこうむったら1ルーブリについて20ルーブリを弁償する、という約束だったという(201)。

二度目の危険は海賊に追われたのである。パレスチナからの帰途、数隻で船団を組んだ商船が小アジア南西部の聖ニコラウスの生まれ故郷ミラの町に近づいたとき、沿岸から不意に無数の小舟が漕ぎ寄せてきて、あっというまに取り囲まれてしまった。商船隊は近くのカステラローザの港に逃げこんだが、町から小舟が漕ぎ出してきて、疫病(ペスト)が流行中という理由で上陸拒否を通告された。仲間の船のうち一隻ではトルコ人船長が海賊と闘って戦死し、もう一隻では疫病が発生した。ルキヤーノフらの乗った船は夜陰にまぎれ海賊船のあいだをぬって港外へのがれた。賊はなおも追跡してきたため、1703年の復活祭は海賊の包囲の中でした。それからしばらくしてやっとトルコの軍艦が救助にあらわれたのだった(311-314)。

これほどの困難や危険をとまなう旅だったとはいえ、聖地にたどりついたときの喜びはあらゆる苦労をおぎなっておりあまりあるものだった。ルキヤーノフの次の言葉はおそらく額面どおりに受けとるべきであろう。「主の墓を目にしたとき、われわれの心は喜びにあふれ、道中の苦しみを忘れてしまった。われわれはひざまずいて主の墓に礼拝したが、涙をおさえることができなかった。」(263)

自分たちが使用した貨幣について、残念ながらルキヤーノフはくわしい記録をのこしていない。わずかに、小ロシアのネージンでモスクワの貨幣を金貨とターレル貨に交換したこと(145)、さらにキーエフで「貨幣をかえた」(153)と書いているだけである。トルコ帝国の単位はすべて「ターレル」と「エフィーモク」、パレスチナではそのほかに「コペイカ」、「チェルヴォンヌイ」と「パラ」の単位で金額が示されている。

V 記録のあり方

ルキヤーノフの聖地巡礼記の第一の特徴は、このジャンルのあらゆる記録の中で最も巡礼記らしくない作品であるということである。それは叙述の対象からして明瞭である。中世ロシアの巡礼文学の最初にして最高の作品として定評のある修道院長ダニルの旅行記においては、新約ならびに旧約聖書にちなむパレスチナのさまざまな場所や建物に関する記述が全体の90%以上を占めている。ルキヤーノフの聖地紀行においては、エルサレムに到着して

からそこを出発するまでの記録は全体の4分の1弱である。聖地でのルキヤーノフの足跡はエルサレム市内と郊外ではサーフ修道院におよんでいるにすぎないが、その記述も個人的体験をのぞいた部分は16世紀のコロベニコフの巡礼記の焼き直しであることがすでに早くから指摘されている⁽¹¹⁾。

ルキヤーノフはパレスチナ以外でもキーエフの洞窟修道院、イスタンブルのソフィア寺院——トルコ支配の下でイスラム寺院に変えられてはいたが——をおとずれ、どちらでも深い感銘を受けている。イスタンブルでは正教会のいくつかの聖堂を次々にのぞいて歩いていたかのような記述もある(209)。その意味ではこれは聖地巡礼であるとともに諸聖地の巡拝記録ともいえるが、むしろ分量から言えば道中記といった方があたっているのではあるまいか。「ルキヤーノフの著述においては聖地の描写は形式的にも内容的にも後景に退いている」⁽¹²⁾というドイツの研究者ゼーマンの指摘には賛成せざるを得ない。

ルキヤーノフにとってより重要だったことは、秘められた目的ともいべきギリシャ人のもとにおける信仰と儀礼の調査の結果を別にすれば、旅の途上で遭遇したさまざまな困難や不安であり、人の情けのありがたさであったにちがいない。前者の内容はすでに述べたので、ここでは後者について2、3の例をあげよう。ロシア領内の旅では町ごとに宿を提供してくれた人物（おそらくは同じ旧教徒の仲間）の名前が挙げられ、彼らがいかに巡礼たちをもてなし、馬には燕麦や干草を食べさせてくれたかがこまごまと書きつらねられる。たとえば小ロシアへはいったばかりのグルホフでのこと、「(人びとは)親戚以上で、彼らの心には炎のような愛がもえていた。われわれを2露里ほど町の外まで見送ってくれ、涙をながしていた。何と心やさしい人びとだろう。できたらわれわれといっしょに行きたいという気持がありありと見えたので、強いて追い返すわけにもいかなかった。2丁ほど離れてうしろを振り返ってみると、あのやさしい人びとはまだ立ってわれわれに向かっておじぎをしていた。」(141-142)このような情緒でん綿たる別れの情景は知人のいるところではつねに繰り返された。

キーエフを出てロシアを離れるときの気持をルキヤーノフはこう書いている。「うれしくもあれば悲しくもある。うれしいのは聖地へおもむくため、悲しいのは異国、ましてイスラムの土地へ足を踏み入れたこと。」(153-154)これほど主観に徹した情緒的な巡礼記は稀であろう。イスタンブルでもエジプトでもパレスチナでもこのような記述の仕方は基本的に変わらないが、外国では喜びや悲しみのほかにさらに驚きの感情の吐露があらたに加わっている。バルカンで生まれてはじめて高い山を見たとき、泡立つ海に接したときには子供のよう感動したが、エジプトで漆黒の皮膚をしたアラブ人を見たときには恐怖をすらおぼえた。「彼らは獣のようで、自分が食べられるのではないかと思った」(226)というのである。

個人的な感情を卒直に表現するような文章の書き方が17世紀までの中世ロシア文学

(11) Seemann, *op. cit.*, S. 370-373. コロベニコフの巡礼記はロシアで最も広く読まれたものの一つであるが、1558-59年の商人ワシーリイ・ボズニャコフの記録を手直したにすぎないというのがほとんど定説となっている。Stravrou and Weisensel, *op. cit.*, p. 40-42.

(12) Seemann, *op. cit.*, S. 373.

の伝統から大きく逸脱することは言うまでもない。これと類似する作品としては旧教徒の指導者の一人アヴァクームの書いた自伝が知られるだけである。これについてはやはりゼーマンにルキヤーノフの記録が旅の苦しみを強調する点でも、さらに語彙と統辞法についてもアヴァクーム自伝に酷似するという論証があるので⁽¹³⁾、ここでは反覆を避けることにしよう。

たしかにアヴァクームの伝記の中で最も印象的な個所の一つは、シベリアへの流刑の旅でなめたさまざまな辛酸を物語る部分である。一体旧教徒たちは自らの生涯の苦しさを語ることに特別な意義を見出していたように思われる。19世紀中葉、ドナウ河口に近いドブルージュで暮らしたガンチャールという旧教徒は、肖像写真を撮影するときわざわざその右手に「わが生は地上においてにがし」と書いた紙片をさげていた⁽¹⁴⁾。国家教会から分離した旧教徒たちが長期にわたって当局から苛酷な迫害を受けたことは広く知られている。アヴァクームのように土牢にとじこめられたのちに火刑に処せられた者もいた。食を断たれて飢え死させられた者もいた。国教会への改宗をこばんで修道院などの獄舎に何十年もつなされた例もある。多くの者は警察と軍隊の追求をのがれて深い森や僻遠の地にひそんだり、国外に逃亡した者の数は何十万という規模に達した。彼らの生活が苦しくなかったはずはない。しかしそれだけに彼らは信仰を貫くために生命すらいとわぬ強靱な意志と忍耐力をもつ人びともあった。だが、生活が困難であることと、その困難をあえて表明することは別の次元の問題である。おそらく旧教徒たちは自らの受難を強調することはそれを知る同信者の信仰を一層かためるために有益であり、必要ですらある、と考えていたのではないだろうか。それは単なる愚痴や弱音とは異なるものであったと考えられる。

もう一つだけルキヤーノフの巡礼記とアヴァクーム自伝との注目すべき類似点を挙げれば、「悪鬼に憑かれる」という現象に対して両者が強い興味を示していることである。アヴァクームが自分の生涯の記録の中で言及している「悪鬼憑き」の男や女たちの数は5本の指にとどまらない。ルキヤーノフはこの点でも師の先例にならったというべきだろうか、エルサレムで悪鬼に憑かれた女と出会った経験と、イスタンブルからの帰途キャラバンを組んでルキヤーノフと同行していたロシア人商人の手代が深夜突然悪鬼にとりつかれ、夜じゅうわめきちらして着ていた衣服をずたずたにひきさいたため、枷をはめてキーエフまで荷車にのせて運んだ次第をこまごまと語っているのである。

とはいえ、ルキヤーノフはアヴァクームの模倣に終始しているわけではない。彼の道中記の顕著な特質は、自らが通過したほとんどすべての町についてそこでの自分たち一行の行動の記録のほか、町そのものの地誌学的あるいは人文地理的な概観を多少なりとも提示し、それと並んでその地での穀物、野菜と果物、ワイン、魚と卵などの価格の高低を論じていることである。パレスチナのロメルについての記述をその一例として挙げよう。「〔1702年〕10月7日ロメル着。修道院の宿坊に泊まる。ここにはエルサレム修道院の僧がひとりで

(13) *Ibid.*, S. 373-376.

(14) この写真は「ロシアの往時」(*Russkaja starina*) 誌1883年4号に掲載されている。

暮らしている。ロメルの町はヤッファよりやや大きく、野原のまん中であって、近くには川も井戸もなく、海から15露里も離れている。町全体がトルコ人のために荒らされている。物はすべて豊富で、近くに多くの村々がある。週に2回市が立つ。ぶどうは1コペイカで好きなだけ買える。ナツメヤシは安い。レモンは1コペイカで30～40個、イチジクも高くなく、1コペイカで干したものが1籠、卵は1コペイカで8～10個、牛乳は高い……小麦が多く作られているので、パンは安い。巡礼が多く集まると食事代が高くなる」(241)このあとに正教会に属する聖堂や修道院についての記述がつづくのである。

このような世俗的な事象に対する注目はこれまでの聖地巡礼記にまったく見られなかったもので、ロシア文学の歴史の流れの中においてみると、一種のルポルタージュ文学として特異な位置を占めることはまちがいあるまい。

« RÉSUMÉ »

IOANN LUK'IANOV'S TRAVEL TO THE HOLY LAND
— A Case Study of the Russian Pilgrim Literature —

Yoshikazu NAKAMURA

In the beginning of the eighteenth century a Moscow priest, Ioann Luk'ianov, belonging to a group of "Old Believers" made a pilgrimage to Jerusalem together with several comrades. Leaving Moscow just after the Christmas of 1701, they passed through Kiev and the then Polish steppe, and, by a ship which set sail from Galati on the Danube, arrived at Istanbul, the capital of the Turkish Empire, at the end of March, 1702. Late in July the party took sail from Istanbul for the Holy Land and reached Jaffa in the middle of September via Egyptian towns on the delta of the Nile, Rashid and Dimyat. The way from Jaffa to Jerusalem took more than a month and a half owing to the skirmishes between the Turkish garrison and Arab bandits. After an eighty day stay in the Holy Town and its environs from the end of October to the middle of January of the following year 1703, Luk'ianov and his fellow pilgrims started off home, following the same route as the outward journey and arrived at their native land in the summer of that year.

Luk'ianov's records of his travels are quite different from the long-established tradition of Russian pilgrim literature beginning with the famous "Pilgrimage of Abbot Daniil to the Holy Land" written in the early twelfth century. First of all, according to P. Mel'nikov, a nineteenth century expert

on the history of Old Believers, the genuine aim of Luk'ianov's journey was, in spite of the pilgrim's complete silence, to investigate the real state of faith and ritual of the Greek Orthodox Church so as to accuse the State Church, their oppressor, following servilely the Greek model, as well as to search for a bishop preserving the purity of primitive Christianity with the intention of establishing their own hierarchy. Luk'ianov was in this sense the first explorer of Old Believers' utopias which attracted so many followers in the succeeding centuries.

The description of the Holy Land does not occupy the central position of Luk'ianov's accounts of his journey. More than half of his story is devoted to curious experiences in strange lands and difficulties caused by natural and man-made disasters: frost, flood, muddy roads, storms on the sea, avarice of Greek clergy, threats of Arab robbers and exciting pursuit by notorious Mediterranean pirates. We can not but agree with K.-D. Seemann, a German scholar, that Luk'ianov's heavily sentimental and subjective style shows the traces of influence of the autobiography written by Avvakum, a prominent leader of Old Believers, who suffered martyrdom some twenty years before. At the same time, it seems to us that we should pay proper attention to the objective side of his accounts. The Russian pilgrim, indeed, describes in great detail topographical and human geographical features of almost all the towns, domestic and abroad, where he stayed on his way to the Holy Land. He even reports with admirable scrupulosity the price of daily necessities such as bread, wine, fruit and fish in each town. In this respect Luk'ianov's records of his pilgrimage may be defined as a remote forerunner of modern reportage literature.